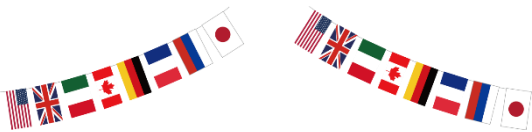


スポーツおじいさんにないたい！①



『ヤングゼネレーション』

國友万裕



1. 近づいてくる老いと死

今年の2月のことである。

映画の途中でトイレに行きたくなくて、トイレに行ったところ、出版社の社長から着信が入っていることに気づいた。ドキッ。

今ちょうど本のことでお世話になっている最中で、今回の本はあれこれ難航して、書き換えたりもしていたので、不安だった。何か最悪のこと。例えば、事情が変わって出せなくなったとか、そういう電話なのかと思ったのだった。

早速かけ直すと、社長の声。

「実は、〇〇が亡くなりまして、先生の本は私との約束ですので、出しますが、、」

「え！」

亡くなった男性は、これまでも俺の出した本やテキストを編集してくれていた人だった。癌だということは聞いていたのだが、術後は良好で、病院にパソコンを持ち込んで仕事をなさっていると聞いていた。

何回かお会いしているのだが、彼も俺と同じ九州出身で、生まれた年も一緒。ただ、俺は2月、彼は11月なので、学年は俺の方が上である。俺は還暦になったばかりだが、彼はまだ59歳。若死にだ。

ちょうど映画を見ている最中だったので、電話で長話はせずにすぐに席に戻ったが、その人のことが頭にかかって、映画を楽しむ気にはなれなかったのだった。

今は人生100年時代だと言われる。

とは言っても、100まで生きる人はそうそういるものじゃない。でも90まで生きる人は増えていて、九州にいる俺のおじさんは、もう88歳のはずだが、まだそれなりに元気に生きている。

俺ももう 60 歳。もう若くはないし、このところ、もう死んでもいいかという気持ちになることはあるのだ。もう十分、人生を味わってきたし、別にそれほど思い残すことがあるわけでもない。ただ、死ぬのは怖いのである。

死んだらどこに行くのか。無になるのは怖い。だから、どこかに死後の世界があることを信じたい。

臨死体験をした人たちは、死ぬのは怖くないという人が多い。しかし、あくまでも臨死体験なわけで、実際に死んだわけじゃないのだから、どれもこれもはっきりした証拠があるわけではないのだ。

確かに、この世は解明されていない。そもそも人間はなぜ存在しているのか。最初に種を作ったのは誰なのか。そんなの誰にもわからないのだ。そして世の中には理屈では説明できないような摩訶不思議なことというのはたくさんある。死んだら、死後の世界に行って、その謎が解けるんじゃないかなあとぼんやり思っている。でも、それは死んでみないことにはわからないのだ。

年は確実にとっていくものなのだと思う。俺は結婚していないし、子供もいない。しかも、先生なので普段が若い子と接している。だから、普通の同年代の人に比べれば若いと言われてきたし、自分でもそうだと思っていた。しかし、鏡を見ていると確実に年はとっているのだ。

2. スポーツができなかった

60 歳になって、つくづく思うのは俺の人生の癌はスポーツだったということである。スポーツができなかったことは、俺にとっ

ては致命的だった。

俺は今でもスポーツに対するコンプレックスは抜けていない。今力を振りしぼってこの原稿を書いているが、本当は自分がスポーツ音痴だったことを書くのはつらいのである。

スポーツができなかったことで辛酸を舐めるような経験をしたことは数えきれないほどにあった。もし、スポーツが人並みにでもできていたら、俺はもっとエリートコースを歩めたんじゃないかと思う時もある。

俺は体育の授業が前日から憂鬱だった。体育の授業は週 3 日はあるから、週の半分は憂鬱だった。だから勉強にも熱中できなかった。中学になると体育の授業をサボり始めた。

子供の頃は勉強ができるやつよりもスポーツができるやつが覇権を握る。だから、俺はいつだってヒエラルキーの最下位の男子だったのである。

この頃になって、岡崎勝さんの『体育教師をブツとばせ』をじっくり再読した。体育教師は脳筋であり、何も考えずに自分の衝動のまま生きているのだということがわかった。だから、あれだけ理不尽なことを生徒に臆面もなく押し付けることができるのである。子供がそのまま大人になったような人。普通のモラルとは異なった枠組みで生きているのが体育教師なのである。

俺が今でも殴ってやりたいくらいに怒っている中学時代の体育教師は、地元の中学の校長まで上り詰めた。あんな懲戒免職にでもなった方が相応しいようなやつが校長だなんて俺は思っていたのだが、岡崎さんの本を読んでいると、校長になるのにも、あれこれ政治的な取引があって、ああいう

やつの方がむしろなりやすいのだろう。

俺はスポーツができないことで勉強にも熱中できず、常にクラスの最下位のヒエラルキーの男子だった。そういう毎日が、何年も続いたら、当然性格は卑屈になっていく。小学校の頃の1年間は大人になってからの1年間の10倍くらい長く感じられるものなのだ。

そんな俺に、中学の頃の担任の女の先生は、「体育なんて、高校までで、そのあとはないんだから」と言った。高校の時の担任の男の先生は、「パーフェクトな人間なんていないんだから」と言った。

大概の人はそう言うのだ。「人間なんて、誰でも欠点はあるんだから、体育ができないくらいは・・・」と。こういう台詞をきくたびに、こういう人たちはそういう問題で悩んだことが一度もないんだなあと、自分の孤独と惨めさがますます深まったものだった。

それくらい、たいしたことじゃない！???

じゃあ、なぜ、できない子に対してあんな酷い怒り方をするの？ できないことなんて、たいしたことじゃないのだったら、なぜ、子供の人格を壊すような怒り方をするの??? 丁寧に教えてくれた上で怖いというのならばまだしも、何も教えようとはしないで、ただ怒鳴り、生徒の自尊心を傷つけるだけの体育教師たち。

俺の心は15歳の時についに壊れた。心はある日突然壊れるのだ。それまではかろうじて動いていた時計が、ある日突然、まったく動かなくなるように。俺の心はシャットダウンしてしまったのだった。

自分でも自分の心がわからない日々だっ

た。

不登校になったあと、市民会館で講座が行われるというので母と一緒に藁をも掴む思いで聞きに行った。この人は京都から啓発に来ている30ぐらいの人だった。講座の内容は、今流行りのポジティブシンキング。考え方次第で、思わぬ力を人間は発揮すると言う内容のものだった。

講座の翌日、個人的にアポイントメントをとって、この先生と母と3人で会った。

この人は他の人たちに比べればある程度はわかってくれた。この人自身も体育はできなかったとのことだった。

母がその先生に言った。

「体が大きいから、それくらいのことはできると誤解されるみたいで、なぜ、ボール投げくらいのことできないのかと先生から怒られるみたいなんです」

その先生は、「スポーツなんて、体が大きいからできるなんてものじゃないよね」と理解してくれた。

だけど、そのあと、この先生はこういうのだ。

「私もできなかった。でも、私は逃げませんでしたよ。みんなからカッコ悪いところを見られて、恥ずかしかったけど、頑張りました。」

これが、この先生の限界だったのだった。今の視点で考えるならば、できない子の自尊心を傷つける体育の先生の方を改めさせるべきなのであって、生徒の方の問題ではないのだ。

ところが、この時代の人、社会のあり方、教師のあり方、教育のあり方に対して疑問をもっていなかったため、こういう答えしかできなかったのだった。

どれだけつらくても、理不尽な要求をされても、自尊心を傷つけられても、他にもっと恵まれない人はいるんだから、頑張るんだというのが当時の平均的な日本人の考え方だったのである。サンドラ・ヘフェリンがいうように、日本は「根性論」と「同調圧力」の国なのだ。

儒教的と言ったらいいのだろうか。日本は、上下関係が厳しい。そのため、親や先生はそれだけで敬わなくてはならないんだという考えが強かった。其の伝統の上に胡座をかいていたのが、当時の教師たち、大人たちだったのだ。

人によって能力の違いはあるのに、その部分は考えずにできる子と同じ基準をできない子にも適用して、叱りつける彼ら。俺はあの頃、身体障害者になりたいと思ったこともあった。身障者だったら、体育ができなくても怒られることはない。むしろ同情の目で見てもらえるからだ。

俺はこの京都から来た先生にもう一度会ってそのことを話したいと、何度か名前を検索したものだった。この先生の名前は世の中に2人といえないような名前なので検索すれば出てきそうなのだが、出てこないのである。

おそらく、こういう啓発活動は辞められたのだと思う。

京都の大学を出られていることは確かなので、おそらく、雰囲気からすると立命館なのではないかとも思うのだが、今となっては調べる余地もないのだ。

痩せて、神経質そうな先生だったので、もう亡くなっているのかもしれない。

3. 京都踏水会の先生たちに会いたい。

俺は週に1度くらいの頻度でボクシングジムに通っている。もうかれこれ4年目である。全然上手くならないが、それはそれでいいかと思っている。俺は以前は近くのスポーツクラブにも通っていた。しかし、ここはもう辞めてしまった。別にそのスポーツクラブに不満があるわけではないのだが、どっちみち仕事が忙しいからそうそう行かない。行かないのに会費だけ払って、お金がもったいないのである。

ここを無理して続けていたのは、プールにたまには入っておかないと泳ぎ方を忘れるという危惧があったからだった。そのため月に一度はプールに入っていた。

ところが月に一度くらいの水泳だと、むしろ逆効果だということがわかってきた。下手な泳ぎ方の癖がついてしまうのだ。このスポーツクラブでは特定の時間帯以外インストラクターはついていないからである。

実は今年の春、水泳部の教え子と久しぶりに京都踏水会にいった。思えば、俺が水泳ができるようになったのはこのプールのおかげだった。ここは選手を養成するクラブなので、一般のお客さんでも相当泳がされる。20代、30代の時はここで週3日あるいはそれ以上泳いでいた。何よりもスポーツコンプレックスを解消したい、その一心だった。

それが30代の半ば過ぎて、極貧になり、ここに通うお金すらなくなった。そのためフリースイミングでたまに泳ぐ程度となった。40になって経済状態は少し持ち直しはしたものの、ちょうど近所に先述のスポーツクラブができたため、ここに乗り換える

ことになった。

京都踏水会は俺のところからだ自転車
で30分、バスでも30分ぐらいかかる。近
所の方がいいかと考えを変えたのだった。

それから早いものでもう18年ぐらい過
ぎた。

それが、昨年、俺のクラスの男の子で俺に
懐いてくれる子がいて、その子が水泳部で
京都踏水会で泳いでいるという。その子と
一緒に久しぶりに踏水会に行ったのだった。

さすがに20年行っていなかったもので、雰
囲気は変わっていた。

フリースイミングで2人で泳いだ。しば
らく泳いでいなかったが、泳ぎは忘れてい
なかった。一旦覚えたら忘れるものではな
いんだ。改めてそれを実感した。

プールサイドの係の女性に見覚えがあっ
た。おそらく、若い頃にここに通われていた
女の子で、今は30か40歳くらいにはなら
れているはずだ。

「私以前ここに通っていたのですが、D先
生はまだいらっしゃるんですか」と俺。

「はい、来られています」

「息子さんの方じゃなくて、お父さんの方
が？」

D先生は息子さんが2人いて、2人とも
インストラクターになられたのである。

「はい」

「I先生は？」

「はい、来られています。ここは定年が75
歳なんですよ」と彼女。

「A先生は？」

「はい、来られています」

A先生は確か俺と同年のはずだった。
爽やかでいい先生だったのだ。この先生は
20代くらいで結婚して子供をつくられた。

あの時、結婚祝いをみんなでするからと他
の人たちから誘われたのだが、あの時はお
金がなくて、それに参加することすらでき
なかった。それにあの当時の俺は兵庫県の
大学まで院に通っていて、20代後半になっ
て学生をやっている、しかもバイトもして
いないことに引け目を感じていたため、行
くの抵抗があったのだった。飲み会とな
れば、プライベートなこともある程度は話
さなくてはならなくなる。

また会う日は来るだろうか。思えば、この
20年間くらいはそれまでにも増して、月日
の経つのが早かったのだ。また会いたいな
あ。今度は一緒に飯でも食べて、対等に話を
してみたいと思ったものだった。

泳いだ後、俺は教え子と2人で、近所の
からふね屋に行って食事をした。ハンバー
グをおごった。彼も満足してくれたみたい
だった。あー、よかった。

俺はこういう体育系の子と男同士の付き
合いをするのがすごく好きだ。それは俺が
若い頃、体育会に入りたくても入る能力が
なかったことから来ていることは明らかな
のである。

俺は性格的には体育系なのかもしれない
のだった。

4. スポーツ問題は男子にとっては深刻

60歳にしてアメリカン・フットボールを
初めて見た。

ここにきたのも、2年前に教えた体育会
の男の子がチケットを手配してくれたおかげである。

テレビなどで断片的に見たことはあるが、
グラウンドで至近距離で見たのは今回が初

めてだった。アメフトをじっくり見て、アメリカのスポーツについて勉強したいとは以前から思っていた。

アメリカの4大スポーツは、アメフト、野球、バスケット、アイスホッケーである。映画なんか見ていると、サッカーやラグビーがアメリカ映画で描かれることはほとんどない。ちなみにサッカーはアメリカでは女子のスポーツなのだそうである。

前にアメフト部の男子に聞いたのだが、アメフトは戦争のようなルールの試合なのだそうである。日本はそこまでないみたいだが、アメリカでは乱闘なども起きるし、そのことがルール違反とは見做されないらしい。

今回、アメフトの選手を間近で見たのだが、防具をつけているため、ガタイがものすごく大きく見える。アメリカ人だったらもっとマッチョに見えるのだろう。この辺りもアメリカでアメフトが受ける理由なのかもしれない。アメリカはマッチョ礼賛の伝統を持つ国なのである。

『スポーツジェンダー学への招待』（明石書店）と言う本によると、男性は強く、女性は美しくがスポーツのコンセンサスなのだそうである。実際、スポーツは男性らしさを構築する装置でもあるらしいのだ。男同士で力を合わせて、相手のチームと戦う。まさにチームスポーツは昭和の企業戦士と似ているし、男性性の構築のための装置だろう。

一方で、女子のスポーツはシンクロナイズドスイミング、新体操、フィギュアスケートなど、美しさを競うというイメージがある。女は男よりも外見が重視されることなのだろう。これはこれで大変だろうとは思いますが、強さを強いられる男も大変な

のである。

子供の頃からスポーツができなかった俺は、男性的な活動の全てから除外されることになったのだ。

スポーツができる子は、野球、サッカー、ラグビーなどのクラブに入って男性性を発揮できる。他の男たちと戦友的な友情を深めることもできる。結果として、日本の企業社会にもスムーズに入っていける。

しかし、これは、スポーツが全くできなかった俺にとっては過酷なイデオロギーだった。もし、俺がスポーツができていたら、もっと勉強にも熱中できていただろう。将来に対しても前向きになれていただろう。

これを言うと、スポーツだけじゃない、勉強だってできない子は辛いじゃないかと反論する人もいるのだが、勉強のできない人は塾に通うこともできる、家庭教師をつけることもできる。先生だって、体育以外の先生はできない子をそこまで罵倒したりはしない。確か小谷野敦さんが言っていたと思うが、かつての体育教師は職業差別したいくらい存在だったのである。

今だったら YouTube である程度はスポーツを学ぶこともできるのかもしれないが、あの当時はそんなものはない。体育の塾や家庭教師なんていない。どうする手立てもなかったのである。

その上に俺の親は忙しかった。俺はヤンキーなことをする子ではなかったのに、不良にはならないだろうからと成績が落ちてもほったらかしにされた結果、取り返しのつかない事態へと発展していったのだった。

スポーツ問題は、女性にはわからない部分がある。女性の場合はスポーツ能力があることが女性としての価値を高めることに

はならないからだ。かつて人気子役だったテイタム・オニールが主演した『がんばれ!ベアーズ』で女子がスポーツをすることを躊躇するセリフがある。女子の場合は、スポーツをし過ぎて、筋肉がついたりするとむしろ女性としてマイナスというイメージがあるため、スポーツがしたくても後退りしてしまう女子が多いのだろう。

言ってみれば、男にとってのスポーツは、女性にとっての化粧である。多くの男は自分の彼女がメイクを変えても気づかない。そんなのはどうでもいいからだ。それと同じで、女性の場合は、もちろんスポーツマンがかっこいいと思っている人は多いだろうが、そのことがそこまで男にとって深刻なことだとは思っていない。

俺は女の子からも相当いじめられ、悪口を言われてきたが、スポーツ問題でいじめられたことはないのである。むしろ、女子はスポーツ問題に関しては鈍感なので、スポーツができない男子に対して悪気もなく、無神経な台詞を言うことが多いように思う。

今から 10 年ほど前、ある女性のカウンセラーにスポーツができなくて、いじめられっ子だった過去を話したのだが、彼女からは「ドラえもののび太くんでも静香ちゃんと結婚できた」と言われてしまった。彼女からしてみれば、スポーツができないなんてたいしたことじゃないという意味で言ったつもりなのだろうが、俺はあの一言で彼女にキレてしまった。俺はあの時にやはり女性は、カウンセラーであっても男の表面下の葛藤には気づいていないのだということを思い知ったのだった。

一方で、男子の場合は、スポーツ問題に対

して敏感である。こいつはスポーツができないタイプだという目で見られると、露骨にバカにしたようなことを言われ、いじめられる。俺は、子供の頃から規範から大きく外れている子だったため、他の男子たちは、他のやつには負けても俺には勝っていると思っていた。

俺はスポーツのせいで、ヒエラルキーの最下位にしか入れなかったのである。俺はスポーツ教育の被害者なのだ。

5 年ほど前だったと思う。あるトップランクの大学の学生から、「僕はスポーツが全然できないんです。小学校まではスポーツが全てじゃないですか。だから勉強ができて全然楽しくなんなかったですよ」と言われたことがある。

彼の言葉からすると今でもスポーツ偏重主義は日本の教育のなかに残っているのだろう。これを変えないことにはいつまでも男性は救われない。

その一方で、俺は昭和の教育を受けて、骨の髄までスポーツコンプレックスが染み込んでいるため、どこかでスポーツができるようになりたい。一人前の男になりたい。男の仲間に入りたいという思いを抱え込んでしまっている。

幸い、その後プールを長年やってきて、それからジムにも通ってきたので、今ではそんな鈍そうにも見られない。むしろ、体軀はでかいので、ラグビーとか柔道とかやっているようなふうに見られる。

今となっては俺の過去を知っている人もいない。俺は、昔ラガーマンだったと嘘をついても通るだろう。

ただ、如何せん、もう 60 歳である。今更スポーツマンを目指すのは遅いかもしれな

い。しかし、考えようによっては 60 代になって、普通の男性は体が老いていく頃だから、今だからこそ、スポーツおじいさんを目指してもいいのではないか。

そろそろ、体の健康のことも真剣に考えなくてはならない年齢だ。この連載では、俺のネタである映画のことも交えながら、自分の身体性のことを考えていこうと思う。

5. 『ヤングゼネレーション』(ピーター・イエーツ監督・1979)

母の日。出町座近くの鼓月で、母の日のお菓子が売られていたので、九州の母に送った。母は 86 歳になったがまだ元気だ。若い頃は人の何倍も苦労が多かった人だが、60 歳過ぎてからはそれなりに順風で、今は悠々自適の生活をしている。

普通の老人に比べれば、友達も多いし、お金も持っているので、毎日料理などをつかって余生を楽しく生きているみたいだ。

俺は母には感謝している。俺が不登校になってから、長い、長い回復の道のりに付き合ってくれたのは母だったのである。

不登校だった頃、俺は映画だけが支えだった。今思えば、確かに俺は普通とはずれていた。中学生・高校生くらいと言え、普通の子は友達が欲しい年齢なのだろう。だけど、俺は友達なんて欲しいとも思わなかったのである。

今にして思えば、これもスポーツのせい。スポーツのせいで、俺は普通の成長をしていないのである。スポーツができない子は、他の男の子仲間に入れなくなる。俺はいつだって、遠足や修学旅行のグループ作りが一番嫌だった。俺はどこにも入れなくて、結

局、どこかに押し込んでもらうような子だったからである。

だけど、俺は何も悪いことはしていない。男が自分の人生の責任を社会や他人のせいにするともっともないと言われるけれど、実際、何も悪いことをしていない人を排斥するのは社会の問題なのである。

あの当時映画だけをよすがに俺は 3 年間を生きた。俺としては、話題になった映画は全て見たいと思っていた。ところが、俺は地方都市にいたため、すべての映画が公開になるわけではないのだ。当時はまだレンタルがない時代。そのため、どれだけ見たくても見ることのできない映画は存在していた。

『ヤングゼネレーション』は、そういう映画だった。

俺はこの映画の公開当時 16 歳だった。普通ならば高校 2 年生。ところが俺は高校に入ってからすぐに不登校になってしまったため、1 年休学し、それでも戻ることができず、通信制の高校に鞍替えしていた頃だった。

この映画、この年のアカデミー賞で候補になって、アメリカでは絶賛に染まっていた。しかし、俺の故郷ではなぜか公開にならないのだ。

それで俺は母にねだって遠いところまで見に連れて行っていくれないかと頼んだ。当時はまだレンタルがなく名画座の時代だったので、見逃してしまうとなかなか見ることができない。まして地方都市では見ることができない。実際、あの頃は熱心な映画ファンの人の中には映画を見るために夏休みには東京に出て名画座巡りをしたり、外国まで行く人すらいたのだ。今みたいに配信でレンタルできるような時代が来るなんて思いもしなかった頃のことなのである。

当時、叔母が広島に住んでいて、夏休みごろに神戸の映画館でこの映画をやっていたのである。

母と2人で広島の叔母のところに泊まり、日帰りで映画を見に行く計画だった。

思えば、2人で行き帰りの旅費がかかったわけだからお金も相当かかったのだ。しかし、悲しいことに、俺はあの時、心が乱れに乱れた。

せっかく遠方まで来たんだから映画を見なきゃいけない。だけど、心が揺れに揺れて映画に集中できない。ストーリーが頭に入ってくないのである。結局、最初だけ見て、映画館を飛び出した。母もついてきた。あの時のことを思うと本当につらかった。今思っても目眩がするほどのつらさだった。

しかし、それがあったことで、俺は一皮向け。帰りの新幹線では映画を十分に見れなかったことを洗い流してしまっていた。

母や叔母にも明るい顔ができた。1本、映画が見れなかったくらいで、映画ファンとして失格ではない。そう思えるようになったのだ。

その後数ヶ月後、故郷の映画館で、半年くらい遅れて『ヤングゼネレーション』がついに公開になった。

神様に感謝したものだ。きっと俺が神戸で見れなくても、明るくそれを思い直したから、神様がご褒美をくれたのだと思ったものだった。

『ヤングゼネレーション』は今はDVDも持っている。俺にとっては記念碑的な映画だ。これは大学に進学しない、アメリカ中西部の田舎町の男子高校生たちが自転車レースに参加する話である。

男の子たちの友情が微笑ましく、俺は心

から憧れたものだった。

しかし、悲しいかな。中学くらいの頃までは自分が同一化できる男子が俺の周りにはいなかった。というか、これも体育教育のせいで、スポーツが全然できなかった俺は、最初から男の一員にはなれなかったため、現実の世界で男の友情を味わうことはできないと小学校の頃から諦めていたのである。

そんな俺が少しずつ周囲の男子に同一化したいという欲求を持つようになっていったのは18歳。予備校に入ってからのことだった。同一化の欲望が芽生えた時期が遅過ぎたのである。

その後、俺は無事に大検に合格して、大学にも入った。

とはいっても、その後、俺の人生は一進一退を繰り返した。大学に入ってもうまく行かず、毎日ものがき続ける日々。大学では心無い女子学生たちからの白眼視と悪口。そして、卒業間際にして、指導教授からのアカハラ。

俺はまだ大学の頃のトラウマを振り切っていないのだ。あの人たちは何気ない気持ちでしたこと。俺だって知らず知らずに誰かを傷つけてはきているのだろう。しかし、あの時の俺には、あの人たちのしたことは一生消えないトラウマとなったのである。

しかし、他の大学の大学院に進んで、少しずつ波はおさまっていった。

とは言っても、ついに大学で非常勤ができるようになったのが29歳。どうにか親にお金を無心しなくても生活できるようになったのが40歳である。そして、その後も権力のない非常勤生活。しかし、次第に心は落ち着き、生きることは楽になって行った。仕事も楽しくなって行った。本も出せた。学生

たちとの付き合いも楽しくなった。

あー、長かった。でも、今 60 歳になって、後悔はないのだ。

その間ずっと付き合ってくれた母には感謝だけど、その代わり、上の弟が 27 歳で亡くなった。そして、社会運動団体とのトラブル。人生って、本当にドラマだけれど、俺はどうか幸せなエンディングへと漕ぎ出そうとしている。

俺がラッキーだったのは、挫折の時期が早かったことである。そのため、俺の人生は、10 代<20 代<30 代<40 代<50 代と着々と充実度は増して行っただけ。これから 60 代。50 代<60 代になってくれることを祈りつつ、日々をひたすら生きていきたいと思う。

これからは健康のことを考えて、アンチエイジングに、若々しいスポーティおじいさんになりたい。

そのプロセスをこの連載で綴っていきたいと思っています。